

## 性的破壊的衝動が強い思春期男子への 臨床心理学的チームサポート

東山弘子・松崎亮介

〔抄 録〕

性的破壊的衝動が暴力的行動として学校教育場面で問題化した小6の男児に対して、授業に参加しながら心のケアと人間関係の学びを支援する実践を通して、その有効性と課題について考察した。臨床心理学的専攻の大学院生によるチームサポートは、支援のオリエンテーションが同じでメンバー間の信頼関係が十分であれば、あたかもひとりのセラピストが対応しているかのように進行できること、メンバーの個性をクライアントは父イメージ、母イメージ、男性イメージ、女性イメージなど必要に応じて投影し、取り入れていき、内的成長に有効であることがわかった。

その現象や支援関係の特徴をより多くの事例をかさねて分析し、支援のための連携についても考察していくことが今後の課題として残された。

キーワード 性的破壊的衝動, 授業妨害, 心理臨床的チームサポート, セラピー  
ティックな関係

### はじめに

学校における心理臨床は、スクールカウンセラーによる活動が中心ではあるが、現場からはそれにとどまらず、教育支援活動のなかでかなり広範にリエゾン機能を発揮することを要請されることがある。いうまでもなく、学校における心理臨床と教育とは、重なりつつもかなり異なった目的と方法論をもっている。心理臨床は、クライアントの心理的な躓きに働きかけて、よりそのひとらしく生き生きと生きていけるようにする試みであり、教育は、現実適応に必要な知識や技能をそとから授けようとする営みである。

筆者は現在施行されているスクールカウンセラーとしての実践の中で、学校という現実世非現実の交錯する場におけるより機能的心理療法的かかわりを模索してきた。「コワークシステム」の提案もそのひとつである。(東山弘子 2005) その特徴はスクールカウンセラーである大学教官と大学院生、研修員など複数のものが相談室に出向き、それぞれの個性を生かしなが

ら（生徒が相談員をみごとに選択し、使い分ける）、ダイナミックに機能的にまた総合的に対応していくことができる点にある。さらに、このように学校現場で「役に立つ」臨床心理活動のできる人材の育成を「臨床心理実習」のなかでできるのではないかと考えてきた。

今回の支援のありかたは、現場の要請をうけてもっとも有効な支援方法を模索した結果、複数のカウンセラーが一日ごとに交代するやり方で終日学級のなかで特定された児童の支援にあたるシステムを試行することにした。そして「カウンセラーが日常的教育活動に参加するなかで、こころのつまずきを癒すことと現実適応の課題の両者を視野に入れつつ臨床心理的な支援をする」ことがどの程度可能か、またそのためにはどのような関わり方が必要であるか、などについて考察することを目的とした。その結果、「学校における心理臨床行為とは何か」について多くの示唆を得ることができた。本稿では、事例報告を通して、日常場面の中でできる学校臨床心理学的支援の可能性について考察したい。

〔支援に至る経緯〕 X 年 1 月に B 小学校から、対応に困っている児童に対する、心理的ケアを含むサポートを要請された。卒業までの 3 ヶ月間、B 小学校において月曜から金曜までの終日、5 名の担当者（P、Q、R、S、T）が日替わりで対応する方法を実施した。

## I. 事例の概要

【対象児童】 A 君 小 6 男子（12 歳）

\*薬物依存とネグレクトの為、母親は A を産むとすぐに A を置いて家を出たが数年後、突然戻ってきた。その間 A は祖母にそだてられ、現在は祖母、母親と同居している。父親はいつからかは不明だが別居。

【問題】 A は毎年夏休みに遠方に住む父親に会いに行くことを楽しみにしていたが、小 6 の夏休みを前にして父親の側の事情で会うことができなくなった。このことを境に、A はいわゆる“不良”の年長者と関わりを持つようになり、深夜徘徊等を繰り返し、学校では授業放棄、授業妨害、教室を飛び出す、高いところに登る、叫声を上げるといった奇行が目立つようになり、手に負えない状態がエスカレートし続けた。対応しきれない担任の困惑と疲労は極限に達し、特休をとる寸前まできた。A は毎日登校し、欠席はほとんどしない。

【臨床像】 学年で一番体が大きく、口の周りの産毛や体毛が濃くなってきている。身体的成長は早い、顔にはまだあどけなさが残っており、幼稚な行動も多く「こころ」と「からだ」のアンバランスさが目立つ。いつも同じ黒いジャージ姿で、膝丈まである黒いベンチコートを羽織っている。クラスメートや 5 年生に対しては大声で恫喝したり、力で自分に従わせようとする行動が目立つが、低学年の児童に対しては、一緒に遊んだりと面倒見のよい一面も見せる。

## Ⅱ. 支援のプロセス

(X年1月～3月までの全38回を4期に分けることができる。「」はA, <>はTh, {}はその他の人の言葉)

### 第Ⅰ期(＃1～＃12): 暴力による関係の模索

＃1 (P) 職員室で待機していると、{P先生どこ?}と4, 5人の児童が入ってきた。その中の身体の大い男児が「これ(スーパーボール) ええやろ?(職員室から) 取ってん」と声をかけてきた。直感的にこの子がAであろうと推測された。

父親のことをThに向けてというよりは、両者の間にある空間に向かって話しかけるような風情で、誰かに聞いてもらいたいという思いと、話すことで自分自身が傷ついてしまうことに対する恐れが同居しているような話し方で距離を測っていたようだが、次第にThに直球をぶつけるように、「舍弟!」と呼び捨てにし、荒っぽい言葉遣いをしはじめた。

＃2 (Q) 授業中、先生にプリント学習を勧められるが、「どうせこんなわからへんもん。書くもんもないしー」と抵抗する。Thに半分に折られた鉛筆を見せる。<これ、Aが折ったん? 力強いなあ>と言うと、「そうや」と自慢げに言う。「これやるわ」と折れた鉛筆を渡してくるので名札のケースの中に入れておいた。プリントの半分の埋まった時点で、「いつまでここにいの? どっか行って」と言われる。Aとどのくらいの距離をとればいいのか、見極めていく必要性を感じた。AにとってもThとの接し方を試行錯誤していたように思われる。

＃3 (R) AはThに近付いてきて、身長や年齢を尋ねてきた。それらの質問に対し、Thが答えていると、卑猥な質問をしてくるようになった。クラスの男子はその質問を聞いてにやにや笑っている。この手の質問に対してはあまり乗らず、<今話す話題じゃないねえ>と答えているとPとRはどちらが年上なのかとかPはキレたら怖いかなど月曜担当Thのことを話題にして、Aの否定的な関心をRの関心にすり替捏造し始めた。Aは自分と同じ意見を持つ者を探しているのかと思ったが、実はThとの関係で主導権を握ろうとしているように感じられ、弱みを握ろうとしているように感じた。

＃4 (S) 中間休みに、Aと一緒にグラウンドにあるベンチに座るといきなり自慰行為についてしつこく尋ねてくるが、敢えてとりあわない。取り合わないでいるとPのことに触れ、<Pはめっちゃエロいんや>「そやで。エロエロや」と言う。Thが乗ってこないことを察すると「毎日へんなやつばっか来るなあ」とTh達について話し始める。<変なやつばかりかー。んじゃAはどんなのがいいの? どんなのが役に立つ?>「…普通に授業受けて、勉強して…」言葉に詰まる。<普通やな>「おもんないな」<変やからいいんやん> Aは納得した様子。「あんたが一番“まとも”やわ」<まとも?>「だってPはエロやし…」話が振り出しに戻る。

#5 (T) 1限目は算数のテスト。Aはすぐにテスト用紙を縦に真っ二つに破り、床に投げ捨てる。そのままテストをせずに、計算ドリルをやっているAに初めて話しかける。＜宿題？＞「うん」次のページをやりかけ、「しんどい。やめた」と言って止めてしまう。近くの男児をおちょくりながら、テスト用紙をホッチキスで止めて引き出しに入れ、本を読んで過ごす。他の男児にちょっかいを出すAに、一緒に考えないかと誘うと「おちょくっとなのか」と脅し口調に豹変する。無理に近づきすぎたようだ。

#6 (P) AはThの髪の毛をくしゃくしゃにしたり、「うんちみたい」とThの髪の毛で遊ぶ。Thは馬鹿にされたような気持ちになる。Thの髪を輪ゴムで括ろうとするが嫌だったので、括られないように身をかわしていると、AはThの髪の毛を抜く。Thの髪を抜こうとし続け、結局Aは30本くらい抜いたと思う。

Thの股間に蹴りが飛んでくる。Aの手を掴んでくこの手は人を叩くためにあるんじゃない＞と言うとAはへらへらした表情で自慰行為の振りをし、「これやったらいいん？」と聞く。Thはからかわれたような感じを持った。＜それもいいが、叩くためのものじゃない＞相変わらずAはへらへらとしている。

#7 (Q) 朝からAに髪を抜かれる。「昨日Pの髪の毛もいっぱい抜いてん」と楽しそうな表情で話す。髪を抜くその行為の意味がわからず、どう対処してよいのかもわからなかったため、＜髪の毛少ないねんから、ハゲるし止めてや＞と軽く応じると、にやーと笑いながら去って行く。髪を抜くことで反応を見られているのかと思い、強く拒否はできなかった。その後は少し減るが、やはり毛を抜こうとする行為は完全には止まらず、とても痛かったのでAから物理的に距離をとった。

#8 (R) 図工の授業中、Aは「♪さ～きほ～こるは～なは～」と歌を口ずさんでいた。Thに「ORANGE RANGEのロコローション歌える？」とか「nobody knows + のココロオドル歌って？」などと要求してくる。＜残念やけど今は歌を唄う時間じゃないから歌えんなあ。休み時間とかなら話は別やけど＞給食を準備している時「歌うたってや～」と言ってきたので、ThはAからリクエストされた歌を歌詞の分かる部分だけ歌った。するとAは次々と歌をリクエストしてきた。「♪おとなのかいだんの～ぼる～、の先は？」と尋ねてきてく♪きみはまだ～シンデレラさ～、やろ？＞と、Aのリクエストに応えたりしているうちに、自分の席へと戻っていった。学活の途中、AはThの後に寄ってきて、Thの頭に覆い被さり、股間を触ろうとしてきた。＜あんまり人の嫌がることするのはよくないなあ～＞「オレは別にいいもん！オレはオレやから！自分の思ったとおりにすんねん！先輩も言うてたわ！」（「オレはオレや…」と、本当に自分の存在を主張しているかのよう）

#9 (S) 休み時間になり、AはThとすれ違いざまにThの股間を叩いてくる。Thがそれを防ぐと、なおも執拗に叩こうとする。＜なんでそんなに叩きたいん？＞とThが聞くと、Aの動きがぴたっと止まり、考え込む。「…反応が面白いから…うん、やったときの反応が

面白いからやわ」得心したように何度か頷き、「やったときの相手の反応が面白いやろ？」と  
 言って再び攻撃をしてくる。Thは手でそれを防いでいるが、Aは力が強く、結構手が痛い。  
 Aを強く制止すると、「怒らんといて。大人は怒ったらあかんねんでー」と言う。＜へえ、大  
 人は怒ったらあかんの？＞「うん、あかん。子どもにはおとなしくやられなあかん」また叩い  
 てこようとする。＜痛いって。やめてーな＞「なっ、おもしろいやろ？」＜でも痛いなあ＞「え  
 えやん」話題が自慰行為に。クラスの男子が話題に加わる。「最近しこってる？」＜あんまり  
 人前でそんなこと言ったらあかんで＞「なんで？Pはめっちゃしこってるんやで、大人のく  
 せに」＜大人？大人はそんなことしたらあかんの？＞「もう卒業せなあかんやろー」＜何歳く  
 らいで卒業せなあかんの？＞「二十歳までやな」

#10 (T) 授業の時間になるがAは戻って来ない。校内を探すと、図書室で下級生とト  
 ラブルがあったようで、数名の先生とAが話し合っている。下級生に“おまえ”と言われた  
 ことに怒り、暴力を振ったよう。「年上には敬語を使わないといけない。こいつは使わなくて  
 いいのか」とのAの言い分に対し「この子はまだ4年生やから、これから覚えていくことや  
 などと先生が諭す。Aは中学生の先輩に、言葉遣いが悪いと一度リンチされ、それ以降はちゃ  
 んと敬語を使っていると言う。Aはその場を離れ、階段の踊り場の壁を一発殴る。

教室に戻り、＜よう我慢したな＞と声をかける。Aはそれを黙って聞いていたが「いつま  
 でいるんや」と一喝。その後、Aは壁を殴った際に手の節が擦りむけたのを気にするように何  
 度も見ている。手を洗い、保健室で絆創膏を貼ってもらう。「いつまで貼ってたらいい？」と  
 保健の先生に聞く様子が幼く見える。

#11 (P) AはThの髪を触り、髪を抜こうとする。Thは＜あかんって。上のほうの髪は。  
 まだ頭の下のほうやったら許せるけど＞と言うと本当に下のほうだけ抜き続ける。Thとして  
 は辛かったが、Aは本当に楽しそうだったので＜Aは楽しいねんなあ＞と言う。Aはにこに  
 こしながら「うん」と返す。

#12 (Q) 朝、職員室に置いてあった月曜担当Thの名札に、Aに抜かれたであろう髪  
 の毛が大量に入っていた。Thも二の舞になるのかと思い、教室へ向かう足取りが重くなる。教  
 室に入るとAがPの髪を抜いたことを自慢げに報告する。この日もまたAはチャンスを窺っ  
 て髪を抜こうとしてくるが、＜髪のを抜かれるのは痛いし、嫌やから止めて＞と真顔で応じ  
 ると、先週ほどではなくなる。

Aと話をしていると、いきなり蹴られたり、殴られたりするようになる。唐突で力も強い  
 ので、かなり苦痛。更に「乳もませてー」という発言も加わり、どう対処したらよいのか戸惑  
 う。ダイレクトにThに向かって発せられるセクシャルな発言に衝撃を受けたことや、他の児  
 童がいる前でどのように対応すればよいのかといった迷いから、“できない”ということ伝  
 えることしかできなかった。



### ＜第1期の考察＞

Aとの関わりの中では、性的・破壊的な衝動性の高さが特に目立って観察された。母親にネグレクトされて育ったAの“おとな”に対する不信感は絶対的なものであり、暴力的行為やわざと相手を困らせるような行為を繰り返し、自分に関わろうとするおとなが、害をなすべき存在であるかどうかを常に測ろうとしていた。Thとの関係においては、“おとな”が一番困惑するであろう性的なことを尋ね、それを学校中に言いふらすという行動を繰り返し行い、Thの行動や、自分に対する反応の仕方を見極めようとしているようであった。

Thに代表される“おとな”という存在に対するAなりの見極めは、本事例終結まで一貫して行われ続けるのであるが、とりあえず各Thが自分に対して、少なくとも危害を加える存在ではないとすぐに把握したAは、行為をエスカレートさせる。衝動性が亢進し、Thを殴りつける、Thの髪の毛を引き抜くなどの行為も出現し始める。それと同時に、なんとかして各Thの弱みを握り、優位に立とうとする傾向が窺えた。

### 第Ⅱ期（#13～#21）：キレたAとおんぶ

#13（R）校外学習の日で、朝から大雪。Aは雪の積もった校庭を、雪球を投げながら走り回っていた。見学場所への移動中、Thのところにやって来て、「疲れた。しんどい」と言いながら、雪玉を投げ過ぎてびしょ濡れになった手袋をThの顔に押し付け、突然Thの背中に飛び乗ってきて、そのままおんぶの体勢になった。「肺が痛い。歩けんわ」＜服から煙草のニオイがするけど、まだ吸ってるの？＞「バレた？なかなか止められへん」＜まあ、体にいいもんじゃないんやし、あんまり吸わん方がええよ＞「・・・」Aは黙ってThの話を聞いていた。

教室では虚勢を張って大きな態度を取ることもあるが、Thがおんぶをしている時はすごくおとなしい。内面的な幼さを感じる。

#14（S）Aは教室の黒板の下に座り込み、クラスメートと何やら会話している。Thを見つけると手招きし、呼び寄せる。ものすごくむかついていてキレそうだと訴えるので、そのわけを聞くと、昨日の大雪で履いて行く靴が濡れてしまい、代わりの靴もないので今日は学校を休みたかったが、母親に無理矢理スリッパで登校させられたとのこと。スリッパでの登校は寒かっただろうとところが痛む。その後、昨日の雪について、Aのクラスメートとしばらく話していると、突如、教室の後ろから学級文庫が数冊投げつけられる。Aが「ムかつくんじゃー!!!」と大声で叫びながら手当たり次第に物を力一杯投げつけ始める。「オマエは何なんじゃー!!!」Aの様子は尋常ではない。「オマエ誰やねん!! ああ!?!」, 「このボケ!!!」などと叫びながら、手当たり次第本や物を投げつけるAの姿は鬼気迫るものがあり、その気迫に押されて、クラス内が水を打ったように静まり返る。この“オマエ”がThのことを指しているのか、それとも、母親のことを指しているのかは咄嗟には分からなかったが、Aの強い怒りの爆発を目の当たりにして、何故かとても悲しい気持ちになった。Aが撒き散らした本類をThが片付け始めてしば

らくすると、A も少し落ち着いたのか、物を投げるのをやめ、席に座る。

授業中、A はクラス内をうろうろと歩きまわる。Th がその傍を通りかかった際、不意に Th の背中に飛び乗ってくる。〈おんぶ?〉「うん。このまま走って」抑揚のない声で答える A。教室では走れないことを告げ、A を背負ったまま廊下に出ると、「ダッシュして」と要求され、言われるがままに廊下を走る。「廊下走ったらあかんねんで」〈そやったな。んじゃ、歩こか?〉「あかん、ダッシュ」教室の前に戻ってくる。「あと10回」〈んー、10回はさすがに無理やわー。腰が砕ける。勘弁して〉「じゃあ、あと3回」〈3回やな? 3回だけやで〉と約束し、A をおぶったまま廊下を3往復ダッシュする。教室前に帰ってくる。「降ろさんといて」A を背負ったまま教室へ。A をそのまま着席させる。A は Th から離れようとしなない。

#15 (T) 朝 Th が教室に行くと A は教室の後ろを勢いよく走っており、目が合う。〈そういえば手の傷どうなった?〉A は黙って手を見る。〈かさぶたになったな〉「・・・」A は特に何も答えず教室に入る。

午後の図工の時間、A は隣の空き教室に向かったクラスメート（クラスで1番小柄な男児）の後について教室を出る。空き教室で A とその児童は、模造紙を広げ、寝そべて話をしていたり、A が児童を下敷きにして腹ばいになったりしている。児童を羽交い絞めにしたり、黙って横に寝ていたりする。Th が模造紙の写真に興味を示すと「幽霊やで。ここに顔あんねん。ここ目、目、口で輪郭」と説明する。この時はとても素直な子どものように話をする。

#16 (P) 髪の毛を抜く抜かないで一悶着した後、A は自分の席に座り、Th はその傍に座りこむ。思わず Th がため息をついた時に、A の顔を見るとイキイキした表情をしていることに気づく。〈ええ顔してるなあ。おれ、ほんまに1週間悩んでてほんまに来たくない、A に会いたくないって思ってたけど、そういう A の顔見れてよかった〉と話した。そうすると「嫌やのに来たんやからこれあげるわ」と A は10円玉を Th に差し出す。Th はびっくりしたが、〈ありがとう。10円は受け取られへんから、気持ちだけ受け取っておくわ〉と伝える。それでも A は10円玉を差し出してくるので、〈じゃあ、もらうことはでけへんけど、預かっておくわ〉と、Th は10円玉を受け取り、名札の中に入れておいた。席を立った A がしばらくして戻ってくる。「おれ、ポケットの中にくら入ってるでしょう?」〈うーん、そうやなあ。たぶんタバコ買えるぐらいは入ってると思う〉「おー」と言って、手のひらに10円玉ばかりの小銭を出し数える。数えながらどのタバコがおいしいかということや、タバコの値段のことを Th と話す。小銭は290円。タバコは高いもので300円するし、A にとってお金は大事なものであろうという思いから、先ほど預かった10円玉を A に返した。A は大事そうにベンチコートのポケットに入れた。

#17 (Q) Th の髪を抜く行為はおさまったが、Th の髪に触れて遊ぶ行為が見られるようになる。頭に手を突っ込み、わしゃーと触ってくしゃくしゃにしてい。く。どうやら触り心地が気に入った様で、「Q の髪の毛、指にひっかからへーん」と言いながらくしゃくしゃにしてい

く。Thは一瞬腰が引けるものの、痛みはないため、その行為を受け入れて一緒に遊ぶ。

午後の清掃時間の後、Aがクラスメートに「生まれ変わるなら女がいい？男がいい？」と質問し、「オレは男やなあー」と話している。Thにも訊いてきたので「私は…女かなあ…。Aは？>と返すと、「女は結婚したら稼がなくても生活できるから女は嫌や」とのこと。将来は自分で稼ぎたいと語る。

#18 (R) Aは献立表の前でThの名前を呼ぶ。献立にはチーズ（Thの嫌いなものでAには以前その話をしていて）が書いてあった。するとAは、「うわ～、来週チーズある！オレのもやるわ！」と笑いながら言ってきた。<A、もちろん食べてくれるよね？>「はあ？5千円出したら食ったるわ（笑顔）」<そんなに払えんなあ>「じゃあ2千円！」<チーズ食ってもらうだけなのにお金は払えんなあ、タダで食って？>とお願いすると、Aは笑いながら「それは無理」と言ってクラスメートのところへ駆けていった。Thはこの時、Aと肩を組み、同級生の友達と話をしているような感じがした。

#19 (Q) 朝教室に入ると、AはThの顔をじっと見て開口一番「…おまえ、今日顔薄いな」とにたーと笑いながら言われる。「目のあたりが薄い」と具体的につつこまれ、人の顔をよく見ているものかと思いながら、<あ、ばれた？急いで出てきたしさあ。指摘されるとは思わへんたし、なんか恥ずかしいわー>と若干動揺しつつ応じる。Thに対する“乳もまして”発言に対して、<そんなんしたら犯罪になるよ>と言ってみる。少し気にした様子。

#20 (R) 給食の準備をしていると、Aは何度もThのところにやって来て、Thのお盆の上にチーズがあるかどうかを確かめる。「絶対に食べろや～！」<安心して。もう覚悟決めたから、ちゃんと食べるよ>Thがパンにチーズを挟んで食べているのを見ると、「何や、つまらん…」と言って自分の給食を食べ始めた。掃除時間が終わった時、AはThのところへやって来て、「ちょっと貸して」とThの名札を手取る。そして名札の裏になにやら数字を書き始めた。おそらく誰かの携帯電話の番号。「そこに電話かけてみ？多分めっちゃ怖い人にかかるから」<そんなこと言われたら絶対にかけへんなー。怖い人って先輩？>「まあな、むっちゃ強いで」<そっかあ。そんな人に会ったらボコボコにされるから電話すんのはやめとくわ>「オレ、もう痣つかへんくなってん」と袖をまくり、腕をThに見せてきた。<痣つかへんて、誰かに殴られたりしてんの？>「先輩にボコボコにされたりするなあ」<そんな風に殴られるんにどうして行くん？>「いつも行ってないで。昨日は1時に来いって言われてたけど、雨降ってたから行かへんかった」<1時って深夜の？>「いや、午後1時…。嘘や。夜中や。昨日行かへんかったからボコボコやで」<大丈夫なの？>「どうせ行かへんからな」とAは言い、クラスメートのところへ行った。

#21 (T) Thが教室に入ったとたん「来んな、あっち行っとけ」と机を蹴飛ばす。

1時間目に前日のテストが返却される。Aは85点。数人の児童も同じ点数で「オレこいつらと一緒にやん」と主張。ThがAの机の横を通った時「85点」とアピールするかのように独り言。



<すごいやん>「うるせい」

給食前に廊下の壁を殴っている。指の根元の関節が赤くなっており、「へこんでるし」と少し笑いながら手を先生に見せ「痛くない」と言い、「オレ中学校入ってから悪くなる」と嘯く。掃除時間が終わった頃「(手) ましになった」と Th に言って過ぎ去る。

#### <第2期の考察>

Th という受け皿を見つけた A の衝動性は際限なく亢進し、とうとうそれが爆発するという事件が起こった。直接の原因は、母親との些細な関係の拗れであったが、その怒りを Th に、ひいては“おとな”全体にたいする怒りにまで敷衍させ、「お前は何なんじゃー!!」と叫びながら、教室内のものを手当たり次第に破壊した。

これと平行して、A は Th に頻繁に求めてくるようになる。暴力行為とおんぶという相反する性質を持つアンビヴァレントな身体接触を A が求めた時期である。Th を激しく殴りつけていたかと思えば、次の瞬間には Th におんぶをせがみ、ぴったりと体を預け、おんぶしてもらわないと移動もままならない、という状況が続いた。

#### 第Ⅲ期（#22～#30）：ムカつく!!

#22 (P) 昼休みに A を探すが見当たらない。5 時間目に A が咳をしながら保健の先生と一緒に教室に戻ってくる。「おれ帰れへんで」と A は自分の席に座る。|38度も熱があるのに。保健室に戻ろ|と保健室の先生。A は「制服もらうまでおる」と食い下がる。今日は中学校の制服の販売日だった。放課後になって1 階へ降りると向こうから機嫌が悪そうな A が歩いてくる。<どうしたん? 制服もらえた?>と声を掛けるが、A はそのまま職員室へと行ってしまふ。職員室で A は教務の先生と何やら話をしている。どうやら、A の持ってきた封筒には、制服以外の物(カバン等)の代金しか入っておらず、制服が購入できなかった模様。母親によると、制服は後日購入するのだという。先生が今日は制服を購入できないということを説明するが、A は納得しない。無然としたまま「おい、行くぞ」と Th におぶさってくる。A の希望通りに A をおぶって空き教室まで走る。<熱あるのに、せっかく待ってたのになあ>と言うと、股間に A のパンチが飛んできた。

#23 (Q) 昼過ぎに A が私のところへやってきて、野球のグローブの話をする。近くにいた物知りのクラスメートに話をふりながらグローブの話がもりあがるがグローブにまつわる彼自身の思い出話は聞けずに終わる。

#24 (R) A は Th を誘い、廊下に出る。しばらく話をしていると、突然暴力を振るってきた。<どうしたん? いきなり?>「別に。何となく」と股間を触ろうとしてきたり、足を踏みつけてきたりした。A が放った膝蹴りが Th の太腿にまともにはいり、Th が本気で痛がっていると、「うわあ、ホンマに効いたんや?」と満足気な様子。<本当に痛いんやけど>「キレ

へんの？」＜そんなに動きたいならバスケやろうや＞「バスケはしたいけど、先公がムカツクから行かへん！」＜そんなにバスケの先生が嫌なん？＞「ムカツクねん!!」やりたい気持ちはあるのだが、自分の発言に対し、後に引けなくなっているような感じがした。

#25 (S) 朝、担任から、先週末に A が警察に補導され、今日の間休みに A から事情を聞くという話を聞いた。授業が終わり、間休みにになると、A は逃げるように図書室へ向かうが図書室の前で教務の先生と鉢合わせをし、そのまま先生との話し合いが間休み中続き、3 時間目が始まる直前になってようやく戻ってくる。非常に不機嫌そうな様子。3 時間目の授業が始まったが、A はすぐに大きな声で「あつ、オレ間休みしてへん。今からしてこよーと」と宣言し、教室を出てしまう。Th はその後に続き、図書室に向かう。「警察に捕まってる。警備員おちよくとっただけやのに。警備員おちよくとっただけで犯罪になるん?」「先輩はカットアゲしとってんけど。オレは何もしてへんのに。ムカツクわー」＜何もしてへんのなら、そらムカツクわな＞と言うと、A はニヤリとして、「コレ（タバコを吸うジェスチャー）は、やっとなけど」と言う。Th はおかしくなって、笑いながら、＜それちゃうか? 捕まったんは?＞と言うと、A もニヤッと笑っている。

「オレこの学校で一番本読んでんねんで」A はめぼしい本を集めながら言う。A は司書の机に移動し、自分の図書カードを取り出す。いくつか他の児童のものも見せてもらったが、確かに A の図書カードが更新を重ねて一番分厚くなっている。A の意外な一面に驚く。A は机に座り、積み上げた本の中から手塚治虫の『ブッダ』を取り出し、読み始める。A は読書に集中している。非常に静かな時間を過ごす。「なあ、明日は誰が来るん?」突然 A が口を開く。A は毎週のようにこの質問を Th にしていた。＜明日は T さん…、って知ってるやろ?＞「・・・」A はそれには答えずに、読書を続ける。

#26 (T) 教室に入ると、A はキャスター付きの椅子に乗り、勢いをつけて机に突進していた。脛を打ったらしく、青くなった箇所を友達に見せ、本当に痛いということを訴えているが、あまり相手にされていない。＜大丈夫?＞と Th が思わず声をかけるが、A は何も言わず、友達に向かって痛さを訴え続ける。

床に落ちている本を拾い、＜これ置いとくしな＞と話しかけてみると「お前ムカツくんじゃ!!」と Th に悪態をつく。しかし、A は机に座り、しばらくその本を読んでいた（Th にとっては意外である）。その後、A は女子に混ざってじゃんけんやデコピンを始める。そこには Th も一緒にいたのだが、A の方から近づいて来て、自然に遊べたことが意外だった。

#27 (S) 昼休みに廊下が騒がしくなる。Th が様子を見に行くと、A とクラスメートがケンカをしている模様。そのクラスメートが A と争う姿を見るのは初めて。どうやら給食当番の仕事をやったやらないで揉めている模様。クラスメートは本気で怒っている。言い争いで劣勢に立たされている A が、不意にクラスメートに掴みかかる。相手の肩を掴み、ずんずんと押していく。Th が止めに入ろうとした瞬間、そのクラスメートが膝蹴りを A に食らわせる。

その瞬間かとなった A が反射的にそのクラスメートの顔を殴りつける。すかさず Th が間に割って入ると、怒りを孕んだ鋭い目つきで Th を睨みつける。＜先に殴られたから、腹が立ってんな？＞と A に言うと、A の瞳から憎悪の色がずっと消え、「ああ」と応じて大人しくなる。しかし、相手のクラスメートの気は収まらない様子で、なおも A に掴み掛かろうとする。A もそれに応じる形で、再び取っ組み合いになる。そこに担任の先生が姿を見せ、A に詰め寄る。その姿勢はまるで A が全て悪いと決めつけているよう。A は自分の言い分が全く聞いてもらえないので、激しく反発する。

教室に戻ると、腹立たしさを Th に訴える。「何なん!? あの手! ムカつく…!」＜確かにあの言い方はないなあ＞「ホンマに…!」＜A なりに言い分があったのにな＞「ああ」A は憎しみを込めて何回か Th を殴りつけてから離れていく。

#28 (T) 昼食の時間、給食当番だった A は、おかずを Th の机にもごく自然に置いてくれたり、掃除の時間に Th がたまたま A の近くにいたりしても、全く意識していない様子で、Th はあたかもクラスメートの一人のよう。

午後からは卒業式の練習。友達と喋ってなかなか静かにならないことはあるが、その様子は他の元気なクラスメートとそれ程の違いはないのでは、と思う。

#29 (P) 休職の時間、Th がどの席に座ろうかと思まわしていると、A が「P, ここ」と誘ってくれたので、A の左隣の席に座る。「昨日ビール奢ったってん。」「先輩なんか気持ち悪うなって、ずっと吐いてたわ」「おれは大丈夫やった」

授業中、廊下にもいつもとは違う雰囲気を感じた。廊下に出てみると、中学生か高校生ぐらいの派手な格好をした少年4、5人が向こうから近づいているのが見えた。{おい、A おる?} 威圧的な口調。「あ、こんにちは。〇〇さん」A は顔が引きつり、声もやや震えている。Th は恐怖を感じ、見ていることしか出来なかった。担任が間に割って入る。少年の1人がAに向かって「おい、外で待ってるからな」と言い残して教室を出ていく。Th はAの近くに行つてく怖かったなあ。あれ先輩か?>と話しかける。昼食時に、酒類を先輩に奢った話をAは自慢げに話していたが、実際は奢らされていたのではないかということが、この一件で明るみになり、Aの置かれている状況の大変さを考えさせられた。

#30 (Q) 卒業式の練習の際、Aは長椅子にだらーっと寝そべっていることが多かった。「オレは寝ててええねん。先生が静かにしてるんやったら寝てていいって言われたし、寝ててええねん」＜一人だけ何もせんでいいって言われるのは寂しいよなあ＞若干投げやりで、寂しさを含んだような言い方をするAの姿が気になる。

### ＜第3期の考察＞

徐々にThとAが二人きりで過ごす時間が増えてきた。クラスメートをはじめとする第三者がいる時のAの暴力行為は相変わらずであったが、Thとの二者関係が確保されているとき

には、A の暴力行為がほとんど出現しなくなった。また、人前で性的な話題を口にすることがなくなっていった。

A は自分の苛立ちや衝動を、直接的に行動で表すのではなく、少しずつ言葉で表現できるようになり始め、様々なことに対し「ムカつく」と表現するようになった。各 Th に対する A なの意味づけが明確にできるようになり、A が各 Th を上手に利用できるようになったのもこの時期である。

#### 第Ⅳ期（#31～#38）：ほっといたらいいやん

#31（R）卒業式の練習の合間に A は Th のところへやって来た。「その名札貸してや」Th が名札を渡すと A は、それをいきなり 2 F の観覧席へ投げてしまった。〈ちょよ、ちょっと？何するん？〉あまりに突然の出来事に Th は哑然としてしていると、A は自ら梯子を上り、名札を拾い、階下へと投げてきた。〈A～、危ないから降りておいで〉「・・・」Th の言葉を無視して A は観覧席を歩いている。〈危ないよ～〉「ちくしょ～、死んでやるう～」笑いながらそう言うと、A はバスケットゴールに飛び移り、それにぶら下がり体育館へと降りてきた。笑いながら“死んでやるう～”と言わなければならない A の気持ちを考えると複雑な思いがした。練習を終えると A は再び Th の背中に乗ってきたので、そのまま教室まで移動した。

#32（S）授業中、先生に何度も注意された A は教室を飛び出す。Th もその後に続く。A は廊下で Th を待っていた。いつものように A を背負い、〈どこ行く？〉と聞くと A は廊下から見える体育館の中を覗いている。「体育館行こうぜ」A を背負い体育館に行くと、A は Th を連れて体育倉庫に入っていく。「この箱には何が入ってるん？」〈なんやろ？…スリッパやな〉などと実に他愛のない会話を交わして時間を過ごす。ぐっと A と距離が近づいたような気がする。「明日誰来るの？」また金曜担当 Th について尋ねてくる。〈明日は、T さんやって〉「ふーん…」〈いや、もう何回も来てるし、知ってるやろ？〉「R がいい。R にして」〈R 君がいいんや？〉「うん」〈T さんはあかんの？〉「あいつ…、おもないからな。R がええねん」A は遠くをみつめながら話す。あまり嫌がっているような感じはしない。

#33（T）道徳の時間。生類憐れみの令について。“人も保護の対象にしたかどうか”の問いに対し、「殺したらええやん。人間多すぎんねん」と答える。“保護した”が正解だとわかると「人間も大切にせなあかん」と言う。昼休みに、女子 2、3 人の頭を叩き、続いて Th の頭もはたく。痛みはなく、かなり手加減しているよう。〈痛いわ〉と笑って返す。A はそのまま通り過ぎていく。

#34（P）「あ、ちょっとそこおって」と A は Th と距離をとり、助走をつけて飛び膝蹴りを浴びせてくる。それに応じる Th は身体的には苦痛だったが、その半面、不思議と楽しいという気持ちもあった。A は自分が指定した場所に的確に蹴りを入れていたが、狙いが外れ、

Thが防御していないところに蹴りが入る。＜うおー。痛てー!!＞AはThと視線が合った一瞬、手で“ごめん”のジェスチャーをする。Thはそれを見て、Aがすまないという気持ちを表現したことに驚き、同時に嬉しく思った。＜今、ちょっとやりすぎたって思ってくれたん?＞「別に」

#35 (Q) Aは月曜担当Thとモノマネや歌を歌ったりして遊んでいたようで、Thに対しても、「なんかやってえやー」、「あれやって」、「これ歌って」などと次々と要求してくる。しかし、どうしてもできず、＜あかんわー、できひん＞と言っていると、「いつも家でおかんが歌っててうるさいねん」と言いながらAが代わりに自分で歌ってくれる。母親が会話に出てきたことは初めてだったので驚いた。

授業で身体障害者についてのビデオを観賞した時のことである。クラスメートが“障害者はかわいそうだから、周囲の者が思いやりの心を持たなければならない”という旨の発言を次々とする中で、Aは「オレなあ、“かわいそう”てなんか違う気いすんねん。なんかなあ、なんかちゃうねんなあ。ようわからんけど…」と発言する。うまく言葉にはならなかったが、Aの言いたいことは伝わってきたような気がした。

#36 (R) 「R～、ちょっと来いや」再びAに呼ばれ、共に廊下へと出た。漫画やお小遣いの話をしていると、ふいにAが「○○(クラスメート)来えへんの多分オレのせいやで」と言い始める。その児童は登校拒否をしているのか、最近学校に来なくなっている。「めっちゃ殴ったりしてたからなあ」＜何かされたん?ムカついたりしてたん?＞「別に、ホンマに何となくやで…。そろそろ教室に戻るか」とThの背中に乗ってくる。Aは言葉にならない感情や衝動を、暴力や性的な話題でしか表すことができず、そういった行為でしか安定を図れないAを思うと切なくなった。

#37 (S) 各曜日担当Thとスーパーヴァイザーとで話し合い、現在のAの状態を知るためにも、また中学校に進学するAのためにも(中学校スクールカウンセラーへの引継ぎのため)、一度、心理テストを取っておこうということになっていた。

Aにテスト実施の了承を取り、空き教室に移動する。P-FスタディをAに手渡す。Aは吹き出しに「喧嘩上等」と書き込む。最後まで丁寧なゆっくりと回答する。

ロールシャッハテストでは1図版につき1反応ずつ、足早に答えていく。Aの希望で、ソンディテストを施行する。テストが終了すると、結果を聞いてくるので、ソンディテストについて解説する。「オレ、クラスの中でも微妙やねん」「いつもひとりで行動するねん。で、やりたようにやる」Aなりの価値観、正義感で動いているかんじがすると告げると“正義感”という言葉に敏感に反応する、＜その正義感ゆえに周りから浮いてしまうってこともあるんかなあ?＞「うん。オレ周りの奴は気にせえへんもん」＜そやな。一匹オオカミみたいなのところがあるんかな?＞「一匹オオカミ?そう!それ!」Aは“一匹オオカミ”という言葉が気に入ったらしく嬉しそうに何度もつぶやいている。そして、ソンディテストの記録用紙に“1ぴきオ



オカミ”と書き込む。

テストの解説が終わると、突然 A が「オレ昔はいじめられとってんで」と意外な言葉を口にする。くうそっ!? マジで? 想像つかへんわー。いつくらいの話? >「小学4年の時」<そうなんやー。Aをいじめる奴がおったんや? > Aはあるクラスメートの名前を挙げる。「ほんで、むかついたからがつーん殴ってやったら、鼻血がびゅーって出てん。びゅーって」Aは妙に嬉しそうに話している。少し違和感を覚えたので、<なんか嬉しそうやな? >と尋ねてみる。「オレなんか知らんけど、グロイのが好きやねん。ほら、あの、アレ…、生徒同士が殺し合いするやつ」<バトルロワイヤル? >「そう、それ。血が出て、ぐっちゃーなるやつ。ぐっちゃーって」やたら“ぐっちゃー”という擬音を強調し、話す。教室に戻ると Th は他の児童に囲まれる。その様子を見た A から、さっきとは人が変わったような暴力の応酬を受ける。受けようとするが、次第に暴力はエスカレートしていき、受けきれなくなってきたので制止する。制止しても止まらない。今までで一番激しい暴力となる。<やめろって>「それでも止めへんかったらどうする?」<それでも止める>「それでも止まらへんかったら?」<諦めずに止める>「諦めへんの?」<絶対諦めない>一瞬、A が真顔になり、動きが止まるが、すぐに攻撃が再開される。それでも制止し続けると根負けしたのか A は自分の席に戻る。Th はかなり体力を使い、全身打撲だらけとなる。A の住む世界の凄まじさをあらためて感じるようになった。

その後、A は授業を抜け出し、Th はそれに続く。「ここ入ろ」Th の制止を無視し、A は体育館前の廊下に置いてあるベンチの上に立ち、上方にある体育倉庫の小窓によじ登り、中に入ってしまう。すると、体育倉庫の中から大きな音がして、その直後窓から A が這い出してくる。<どうした? >「ちょ、ちょ、中覗いて見て」A と一緒に壁をよじ登り、体育倉庫の中を覗き込む。天井付近まで積まれていた備品がひっくり返って下に落ちて、散らばっている。「これがいきなり頭の上に落ちてきてな」<大丈夫やった? >「大丈夫。それよりこれ…」中を指差す。<見つかったら怒られるな>その瞬間、A と Th は顔を見合わせ、にやりとした後、お互い一目散に廊下を駆け出す。「逃げろー!!」A と Th は大笑い。不思議な連帯感を感じ、お互いニヤニヤしている。

#38 (T) A は散髪しており、服装はジーパンに紺のトレーナー。ベンチコートも着ていない。これまでならば特徴的な外見のお陰で、どこにいてもすぐに見つけることが出来たのだが、今日の A はクラスメートの中に溶け込んでしまったかのよう。

卒業式の練習。5・6年合同の練習は一通り済んだ後に、歌の練習をもう一度することになる。すると、A はスタスタと体育館を出ていってしまう。5年生の先生（女性）と Th が後を追ひ、階段の最上階の踊り場で A をみつける。A は「自分はちゃんとしてたのに歌がやり直しになり、担任が横に付いていた」ことが耐えられなかったと言う。追いかけてきた先生は涙声になり「あんたは何言うてんの。（担任の）先生があんたのためにどれだけ頭下げてまわっ

たと思うてんの。わかってあげて} と話す。「ちゃんとやってたのに」| わかってるって。今日もあんたすごい頑張った。ようできてたよ…| Th もく A が頑張ってるの、知ってるよ。ちゃんと見てるから> と伝える。「(自分を) ほっといたらいいやん」| 先生も子どもがおって、何度放つこうと思ったか。それでも、やっぱり放つとかれへん。親ってそういうもんや。みんなも、A のことが放つとかれへんのやで。ああ今日は A ちゃんジープで、やっぱり似合うなって、いつも一番に思ってるんやで。気になんねん| と先生が熱く A に語る。＜私が毎週学校に来てんのもの、A に会いに来てるんやで。あんま話してないけど、それでも気になるから。さっきも、ちゃんとやってたのに、歌やり直しされるのが嫌やったんやろ？> 「当たり前やん」<それ位、一生懸命やってたん、頑張ってるのわかるから…> 「・・・」A は黙って Th の言葉を聞いている。| 先生が、泣いてたっていうのは秘密な。そろそろ皆戻ってるかな| そう言って5年生の先生が体育館に戻る。＜どうする？まだみんな体育館にいるよ？> と言うと「…行ーこおと」と A は独り言のようにつぶやいて体育館へ向かう。

#### ＜第4期の考察＞

Th と二人きりで過ごす時間が増えるに伴い、A の内省が進み、自己表現の仕方が変容し始めた。クラスの不登校児を気にかけるような発言や過去のいじめられ体験を告白したりと、Th との間によくセラピューティックな関係が樹立し始めたようであった。

しかし、一方で卒業という現実的な終結が迫っており、別れを意識せざるを得ない状況でもあった。そんな中、A が、自分を心配してくれている教師と Th に対し、自分のおかれている状況や、自分をケアしようとしてくれている人たちに対する複雑な思いを、「(自分を) ほっといたらいいやん」という言葉で表現したのが非常に印象的であった。

### エピローグ：卒業式

卒業式には月曜～金曜までの各曜日担当 Th が一堂に会して、小学校へ向かう。A はいつもの黒いジャージ姿ではなく、ジープと青いチェックのシャツを着ており、左耳にはピアスが光っている。

Th らは前もって式が執り行われる講堂へ向かい、6年生の入場を待つ。2列になって入場してくる6年生。A は肩で風を切るような歩き方で、保護者席を見下すような目つきをしながらも、列を乱すことなく歩いていた。ピアスをつけてきていたので指摘するのとやっとなめて笑って先輩と同じやり方で自分も安全ピンであけたという。短く限られた期間の中での関係ではあったが、A とつながりをもてたと感じた。小学校卒業という節目を迎えた A を頼もしく感じる一方、A との関係が途切れてしまうという残念な思いとが Th たちの中で共存している。

A は男性の Th に対して不意打ちでパンチを喰らわせ、まるで自分の相手をしてくれる者

を探しているようだ。ThにはそんなAの姿が寂しく見える。卒業式が終わり、玄関で卒業生を見送っていると、「R～、一緒に家まで来いや～」といきなりThに声を掛けてきた。<いいよ。一緒に行こうか>と一緒に行こうとすると、「ああ…、やっぱりええわ～」と断られる。「これから〇〇会館に行かんとあかんねん」と傍にいたMoに荷物を渡し、颯爽と去っていった。感慨深い別れの挨拶はなかったが、それもA君らしいお別れの仕方だろうと、思うと可笑しくなった。走って校門を出て行くAの後ろ姿が印象的だった。

卒業式終了後、教室で担任からの最後の話が終わり、卒業生が在校生の並ぶ廊下を通して送り出される。送り出される際に、Aを呼び止める。<A。ちょっと>「何や？」語気とは裏腹に、Aの表情はおだやか。素直に近寄ってくる。<これ。先週やった心理テストの結果やから>と言って、A用書き直した簡単なテスト所見が入った封筒を手渡す。「そんなんいらんし、捨てるで？」<うん。いいよ。読んでからな？>という、Aは「ああ」と素直に頷き、上着の内ポケットのチャックを開けて中に大事そうにしまいこんだ。そして、Thと話していた分、遅れてしまったクラスの列に加わるべく、さっと駆け出していった。

教室では、5人のThに対するAの表情が異なり、Aが各曜日の担当者とそれぞれ関係を作ってきたことが伺われる。月曜担当者への帰れコールと、火曜担当者への幼い笑顔が印象的であり、水曜担当者へは対等な仲間のように話しているように見える。ThはAと話すことなく終わり、それが自然な形とを感じる。

## 考 察

### 1 「チームサポート」による支援の可能性

今回支援に当たった5名は同一ゼミに属し、同一の心理臨床のオリエンテーションで臨床を実践し、研修していたことが、あたかもひとりのセラピストが対応しているかのように安定したプロセスをスムーズに進行させたと思われる。そのことと、それぞれの個性にみごとに対応しながら、内的変容をとげたA君の潜在能力とがうまくかみあい機能したと推測される。A君にとって5名の存在は内的イメージとして取り入れられたので、不思議なくらいに違和感がなかった。それは、重要な意味を持つ父イメージ、母イメージ、男性イメージ、女性イメージそしてセルフイメージの発達と、今後関係を維持する時間が許されるのであれば促されたかもしれない内的成長のプロセスへとつながる「出会い」であった。この時点で関係が切れたことが悔やまれるが、おとなへの内的な旅を始めたA君にとって貴重な意味をもった体験であったことを確信してやまない。

AはPのことを「舎弟」と表現したように、クライアントーセラピスト関係のような横の関係ではなく、主-従のような縦の関係性が重要であったようだ。PはあえてAの下につくことにより、Aの“人よりも優位に立ちたい”という欲求を満たし、その背景にあるAの他

者に対する劣等感を補償するような働きをしていた。しかし、Aと主従関係をとることにより、一方的に髪の毛を引き抜かれるという陰惨な暴力や、性的な事柄について執拗に尋ねられ、それを学校中に言いふらされてしまうこととなった。心理面接場面とは異なる、学校という場面で、ThがAに対しどのような枠を提供し、またそれをどこまで維持できるかがはっきりしておかないと、Aの激しい衝動性はThとAの双方を傷つけるだけで終わってしまったのではないだろうか。PはAの激しい暴力にさらされながらも、一線を越えてはいけな場面ではしっかりと踏みとどまって見せ、Aの衝動が垂れ流しになってしまわないように作用していたのではないだろうか。卒業間際には、AがPという“おとな”の存在を介して、クラスメートに接近するようになり、Pは身を挺してAとクラスメートに話題を提供していた。

Qは女性のセラピストであり、Aにとって、性欲の対象としての「異性」が強く意識される存在であったようだ。Aは周りの児童に比べ早熟であり、一人だけ先に第二性徴期に突入してしまった。身体の急激な変化や性衝動の著しい亢進に戸惑い、かと言って相談できる相手もおらず、もてあましていた所にQの登場である。衝動をうまくコントロールできないAは、軽く退行し、「乳もませてー」と直接的に表現するしかなかったようだ。このように直接的に欲求を表現したり、他の男性Thと性的な話題を共有しているうちに、AのQに対する性衝動も収まりを見せるようになり、性的な話題を口にするのが少なくなってきたようである。その後、AはQに対する距離を測りかねていたように感じられた。

Rは、Aと対等に付き合えるような関係をとることが多かったようである。Aと共通の趣味(漫画・プロレス)があり、二人きりで過ごすときにはよく話題になっていた。また、Aとプロレスごっこをすることにより、不完全ながらAの暴力衝動を消化させるのに一役買っていたようである。Aとの親密さという点においてはRが一番であり、卒業が近くなるほどに、AはRを頻繁に求めるようになった。RはAの趣味に対する造詣が深く、Aの自我理想に最も近いThであったようだ。またAをおんぶすることも多く、Aの父親イメージが投影されていたのではないだろうか。Aの健康な部分で付き合うことができたThがRであった。

SはRと表面上は同じような働きをしていたが、Aのターニングポイントとなるような場面に居合わせることが多く、必然的にAの内面と深く向き合う機会が他のThに比べ多かった。現実と非現実が錯綜する学校という場面では、共に心の内奥にまで降りていった者同士が、いきなり現実場面に引き戻されることも多々あり、その場合どうしても拭いきれない違和感が残る。その結果、クラスメートに混じるSを見ると、Aの暴力衝動をかなり刺激することになり、最後まで殴られ続けたようである。一方で二人きりになると、Aの様子は別人のように落ち着き、分割されたAの心が最も観察されやすいThであった。

Tは、Qと同じく女性のセラピストであるが、最初から最後までお互いの距離のとり方に苦慮したようである。Aはいつも明らかにTの存在を意識しており、SにもよくTについて尋ねていたのであるが、実際に目の前にすると、何もできないか悪態をついて遠ざけてしまう。

TもAとほとんど関わることができない状況に苦慮していたようだ。Rがそれとなく聞き出したAの好きなタイプの異性と、Tの雰囲気はどことなく似ており、Aの内なる女性像を最も刺激したようである。無意識的な交流は頻繁に行われていたと考えられる。

チームサポートというこれまでになかったかたちでの支援は、複数の担当者がひとつの事例にかかわることができるために比較的短期間に効果をあげることができるが、担当者間の関係、オリエンテーションについての配慮、子どもの問題に関するアセスメントなどを考慮しなければならない。また、今回は担任をはじめ、学校側の受け入れ態勢が十分であったが常に望める条件ではないことも考慮すべきである。

## 2 支援体制の完備

小学校卒業は人生のひとつまでであり、ひとつの区切りであるが、「生きる」ことの終わりではない。セラピストたちは長いスパンでA君の問題を捉えているので、中学校へ進学してからの思春期の課題が気になりである。父母、教師をはじめとする人々から疎まれて生きていくのではないかと推測されるだけに、新たな支援体制が望まれる。筆者はなんとか中学校との連携をとろうと試み、スクールカウンセラーに引継ぎをし、可能であれば5名のうちの一人でも関われないかと依頼したが、学校には諸事情があったようで、「聞き置く」とのことで縁が切れた。つぎ込むエネルギーが足りなかったことを反省しながらも現実にはなかなか困難で個人では越えられない壁の前で立ちすくむ思いであった。やむをえないとはいうものの、子どもへの支援という観点からは疑問が残る。システムとしてスムーズに機関連携がとれるようにすることこそ、今後へのこされた緊急課題である。

### 〔参考文献〕

- 氏原寛 日本家族心理学会編「学校臨床における家族への支援」家族への支援 2001  
東山弘子 専門性と機動性を発揮するスクールカウンセリングの可能性「佛教大学臨床心理学研究紀要」2001  
東山弘子 日本におけるスクールカウンセリングの現状と課題「佛教大学??紀要」2003  
東山弘子他 学校臨床心理士の「コ・ワーク」システムによる支援「佛教大学教育学部学会紀要」第4号 2004

### 〔付記〕

文中Pは大野通久（修士課程）、Qは岸本久美子（同）、Rは宮前諒平（同）、Sは松崎亮介（研修員）、Tは高津美和子（修士課程）である。なお事例の内容は、プライバシー保護のため、改変されている。

（ひがしやま ひろこ 臨床心理学科）  
（まつざき りょうすけ 佛教大学臨床心理学研究センター研修員）

2005年10月19日受理